

中等英語教育における異文化理解教育実施可能性の検討

ー検定教科書における文化多様性とグローバルイシューに関する分析ー

奥西 有理・木村 純子*

岡山理科大学教育学部中等教育学科

*大阪大学工学研究科戦略支援部

(2017年10月31日受付、2017年12月4日受理)

1. はじめに

グローバル化が進展し将来予測が困難になりつつある現代社会において、学校教育は新しい価値観を生み出すことのできる豊かな創造性を持った人材育成に貢献することが期待されるようになってきている。ローカルな地域の学校においても、グローバルな視点から教科学習を捉えたり、教科間の学習内容を関連づけていくことの重要性が強調されるようになってきている。かつては語彙・文法などの言語知識の獲得とその運用能力の向上を主要な目的としてきた外国語教育も、グローバル社会における実際のコミュニケーションの相手を見据え、より包括的観点から捉えられるようにと変化している。平成28年12月付けの中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」によると(文部科学省, 2016)、外国語教育においては、言語知識とその活用力すなわち英語コミュニケーション能力の育成にとどまらず、日本の伝統や日常文化を尊重する力をベースとして持ちながら、グローバル化の中で多様性を尊重し、多様な他者と協働しながら課題を解決していく異文化理解力を育成することの必要性が示唆されている。

日本の中等英語教育の教室場面では、リーディング・リスニング・スピーキング・ライティングの4技能獲得が急務の課題であるため、外国語教育を通して多様性の尊重や異文化を理解する力をどのように育むことができるのかについては、具体的検討がなされてきたとはいえない。欧州のように多文化が日常的に交差する環境においては、異文化学習に対する意識が高く、言語学習の一部として異文化理解を取り入れていくことは早くから提唱されてきたが(Byram, 1997)、日本では異文化理解力は、英語力向上の副次的産物として他者とのコミュニケーション実践の中で自然と身につけていくだろうと看過されるか、英語で書かれた海外の読みものに触れたりALTなど身近な外国人との交流に関わらせること自体が異文化理解の取り組みであると捉えられる場合もあり、異文化理解力を向上させる教育的意図を持った実際の取り組みが外国語教育の場面で展開されることはごく限定的だったといわざるを得ない。中高生を対象とした異文化理解教育については、交換留学や海外修学旅行参加予定者を対象とした事前研修など特別なトレーニングとして行われることはあっても、教室における通常の外国語教育とは一線を画してきたのかもしれない。異文化を理解し多様な人々と協働できるための具体的知識や技能の獲得方法や教室場面での教育方法に関しては、学習指導要領にも具体的記載はみられない。

1-1 異文化理解の定義と語学教育における位置づけ

外国語教育における「異文化理解」とは何を指すのか。「異文化」に関する学術的研究は、もともとアメリカを中心に発展したコミュニケーション学にその起点が認められる。異文化コミュニケーション学には、「文化の島」という考え方があり、「目に見える文化」だけでなく、海底深く、すなわち人間の無意識の部分にひそんでいる「目に見えない文化」も含めて文化を捉えていく(八代, 2013)。前者の可視的な文化は、生活習慣の違いや建造物の違いなど、「違い」がわかりやすいため比較的理解しやすいが、後者の場合、「違い」ははっきりと見えづらく、人間関係のもつれや相互の誤解の原因となりやすいとされる。そこで異文化理解教育では、見えない文化の範囲まで含み学んでいくことが重要であると考えられている。

次に「理解」についてであるが、深見(2017)は、アクティブな学びにおける「理解」という概念について、WigginsとMctighe(2005)のアイデアを取り上げて、認知だけでなく、行動レベルと認知レベルの両側面にまたがるものであると指摘している。人が真に理解しているときは、説明・解釈・応用することが

できるが、これらは行動レベルの営みであるといい、複数のパースペクティブ（視点）を持つ・共感する・メタ的自己認識を持つ、という認知的機能と相まって可能となるという。そして、あるコミュニティーにおける現実的活用である「実践」を通して獲得されうるものであるとしている。

異文化理解は、国連ユネスコの提唱する持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development : ESD）においても中心的コンセプトとして取り上げられている。ここでいう異文化理解とは、文化的多様性への尊重であり、これはESDの3つの柱とされる学習分野：環境、社会、経済のそれぞれと関係するため、平和で持続可能な社会をつくる基本的要素として作用することが指摘されている（de Leo, 2010）。文化は、ある集団の精神的・物質的・知的・感情的な特徴であって、価値観・信条・態度・行動・習慣・伝統・慣習・アイデンティティー・生活様式・言語・宗教的信条の全てを包括するとされる。かつてはある社会のマイノリティー（少数派）集団の子どもたちは、自文化への軽視や差別的扱いのため自己肯定が困難であるという問題がある一方でマジョリティー（多数派）集団に属する子どもたちの文化的価値観には一貫性があり、依るべき行動基準が明確であった。しかしグローバル化が進んだ現在は、一つのコミュニティーの中で他文化との接触がより頻繁にあり、マジョリティーの児童・生徒にとっても、自らの文化と他の文化の両方について理解を深めていく教育が必要となっていることが指摘されている。

1-2 異文化理解を組み入れた言語教授—欧州発の取り組み

異文化理解教育を日本の学校教育課程で実現するには、外国語だけでなく国語や社会など外国語以外の教科学習の機会にその要素を組み込むことも現実的であると考えられるが、欧州では、異文化理解を外国語教授の不可欠な一部として位置づけるメソッドロジーも存在する。欧州を中心に実践が拡大している内容言語統合型学習（Content Language Integrated Learning、通称クリル（CLIL））では、言語教授において4つのC（Content（内容）・Communication（言語）・Cognition（思考）・CommunityないしはCulture（協学ないしは文化））をその構成要素とするが、4つ目のCommunityには、教室内の生徒、学校、地域コミュニティー、市町村、都道府県、国、地球全体など様々なレベルが想定されており学習活動と学習内容の両面においてそれを実現させるという。すなわちペアワークやグループワークを通して共に学びを深めていくという協学的学習活動のスタイルだけでなく、環境問題等のグローバルな課題を共に考えていくことで、学習者が「地球市民」として位置づけられていき、言語学習を行いながら異文化理解や国際理解が実現していくことが意図されているという（池田, 2015）。

これ以外にも、スイスジュネーブに本拠地を置き、統一した基準で質の高い国際教育を提供することを企図する国際バカロレア教育では、言語教育を含むすべての教科教育の実施を通じて異文化理解の実現が意図されている（大迫, 2013）。特に高等学校レベルのディプロマプログラムでは、Theory of Knowledge : TOK（知の理論）と呼ばれる学習を通して物事を多角的に考察する力を育成するが言語教育にも取り入れられ、生徒は批判的・客観的思考を高めながら言語習得を目指すことが可能となっている。グローバル社会における今日的话题を取扱いながら論理力を鍛え、言語や文化の多様性を認識し、偏見や差別的な思考から自らを解放させることが意図される。授業を通じて言語的知識の獲得と活用、思考力を鍛えることによる異文化理解力が同時に習得できるよう教材開発がなされる。多様な考え方が交錯し合うグローバル社会において有用となるアイデアを出し合い、批判的思考力を鍛えて既存の枠を越えた知の統合や新しい価値の創造が教室内の営みを通して実現していくことが目指される。国際バカロレア教育において異文化理解は、外国語能力獲得の副次的位置づけではなく、両輪として位置づけられていると考えることができるであろう。

2. 本研究の目的

2013年12月に公表された文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」と続く有識者会議を基にまとめられた「今後の英語教育の改善・充実方策について —グローバル化に対応した英語教育改革5つの提言—」は（文部科学省, 2014）、グローバル化進展という背景の下、アジアトップの英語力が目指されるべきであり、英語力の基礎的な知識・技能とともに、それらを活用して主体的に課題を解決するための思考力・判断力・表現力等を育成することが重要な課題であると指摘している（文部科学省, 2013）。英語を使って何が出来るようになるかという観点を重視しつつ、高校卒業時に使える4技能の獲得を目指すことが記載されている。小学校ではことばへの関心とコミュニケーション能力の基礎の育成、中学校では簡単な英語で伝え合えるコミュニケーション能力の育成、高等学校レベルでは、幅広い話題について発表・討論・

交渉などの言語活動を体験させて情報や考えなどを的確に理解し伝えられるようなコミュニケーション能力の育成を目指させるという。教科書・教材については、思考力・判断力・表現力等が一層育成されるよう説明・発表・討論等の言語活動を重視するとしている。ここでいう思考力・判断力・表現力の具体的内容は明らかでなく、これらが多言語多文化社会である欧州を起点とした言語教育と同様に、異文化理解を指すのかについては明らかではない。しかし加速度的に進むグローバル化の中で、それに対応できる人材を育成しようとするなら、多様な人材との実際の関わりの中で信頼関係を築き、共に問題の解決に取り組んでいけるという異文化理解の視点を組み入れることは時代の要請であり、今後日本の外国語教育においても欠かすことができない取り組みとなっていくだろうことが予想される。

そこで本研究は、現状の日本の外国語教育の枠組みの下、異文化理解力の育成を効果的に行うことがいかにすれば可能かを検討することを目的とする。まずは現状の学校教育、とりわけ外国語教育が本格化する中学校の外国語教育において、異文化理解がどのように位置づけられているかを探るために、文部科学省検定教科書について異文化理解の視点から分析を行う。特に、英語初心者レベルの語彙・文法知識の提示が一段落し、教科書の英文にストーリー性が出てくる中学校3年生の教科書を取り上げ、教材内容の分析を行う。分析結果を基にして、中等教育英語科の教育実践において異文化理解教育がどのように位置づけられているかについて考察する。

3. 方法

中学校英語検定教科書の中で採択件数の高いA社およびB社の中学3年生の英語教科書を分析対象とした。それぞれの教科書の各ユニットで取り扱われている英文の内容に関して、2017年10月に言語文化を専門分野に持つ研究者2名で話し合いながら緻密な検討を行った。内容の評価について、Byram (1997) の異文化コミュニケーションコンピテンスの定義とESDの異文化理解の視点 (de Leo, 2010) を参考に、評価指標を作成した。まず、異文化理解の範囲であるが、①他の文化が自らの文化とは異なっているという事実の提示と、②それに関する背景知識等のより深い理解に加え、③地球的規模で考えるべき課題 (グローバルイシュー) やどの国も共通して持つ現代的な課題について事実の提示があるかどうか、④それに関するより深い理解を促す内容が記載されているかの4点を評価の指標として設定した。各々のユニットについて、まずは文化的なあるいはグローバルな事柄の提示があるかどうかをみていった。次に、いずれかあるいは両方があった場合、該当する事柄について原因や背景について触れたり人間や社会との関わりという観点から捉えるなど、より発展的な知識の活用や問題の理解を促進する記載があるかどうかをみていった。これら2段階のプロセスを踏んだ4つの視座からの分析を行った。加えて、異文化理解の観点から、教材の目的達成の程度や利用可能性についても意見を交換しつつ質的分析を実施した。

4. 結果と考察

A社の検定教科書 (以下A教科書とする) は全部で6つの主要ユニットから、B社の検定教科書 (以下B教科書とする) は全部で7つの主要ユニットから構成されていた。それぞれのユニットが取り扱っている題材と、文化多様性と地球的課題に関する指標についての分析結果は、表1に示した。

A教科書では、地球的・現代的課題が文化多様性よりも頻繁に (地球的・現代的課題4ユニットに対し、文化多様性が3ユニット)、B教科書では文化多様性が地球的・現代的課題よりも頻繁に取り扱われていた (文化多様性5ユニットに対し、地球的・現代的課題2ユニット)。文化多様性や地球的・現代的課題に関して、読者がその背景事情や経緯等までわかり、深く理解できる教材は、A教科書においては地球的・現代的課題に関して1ユニット、B教科書においては文化多様性に関して1ユニットみられるのみであった。文化多様性に関してはスポーツや建築物等外国情報の提供、地球的・現代的課題に関しては環境破壊等の情報提示にとどまる傾向にあることがわかった。

また、文化多様性に関しては、どちらの教科書においても、日常生活場面に関連した文化ではなくアートや伝統芸能などの芸術文化も取り扱われていた。自国の伝統文化について将来的に外国人に尋ねられる機会を想定して意図的に取り入れられているものと考えられる。グローバル社会における異文化葛藤の最もありがちな原因であるとされる日常文化、その中でも見えない文化である思考のパターンや価値観が取り上げられているものとしては、唯一、B教科書のユニット1の「好きな言葉」が該当していた。このユニットでは日本人の生徒である久美が、あるクラスメートによって提案されたというクラスのモットー、One for all, all

for one(一人は皆のために、皆は一人のために)という言葉、イギリス出身の外国語指導助手(ALT)であるブラウン氏に伝えている。日本人生徒の持つ文化的価値観がよく反映された内容となっている一方で、この文化的価値観が文化の多様性を表す学習教材としては生かされていない。なぜなら、久美のコメントを聞いたブラウン先生がIt reminds us of the importance of team spirit. と返答しているからである。それを受けて久美は、Right. We must help each other. と返答しており、ALTという異なる文化背景を持つ人材が日本的な考え方に即座に同調を示すという設定は、グローバル社会での現実味あるコミュニケーションとしてのオーセンティシティは認めにくいといわざるを得ない。対比的にイギリスの学校では生徒はどのように考えるかなど、実際のALTとの接触場面で起こりうる意見交換や会話場面が設定されていたなら、学習者の思考力を鍛え、異文化理解力を深めることができる可能性が高まると考えることができるだろう。

また、地球的・現代的課題についても日本人としての意見や個人的な意見を求められることが、実際の外国人とのコミュニケーション場面では多く生じてくる。それを考慮し、教科書で取り上げるトピックの内容や提示の仕方について再検討する余地はあるかもしれない。A教科書もB教科書も地球的・現代的課題に関しては、海外での森林破壊といった政治的中立を保つことができる話題を取り扱っている。しかし、将来的な実際の外国人との接触を想定するなら、「原発の問題について日本人は、どのように考えているのか」といった政治的質問に対してもバランス感覚をもって対応できる必要があるだろう。そのための素地を作ることに配慮した中等教育レベルでの英語教材づくりも検討されるべきではないかと思われる。

表1 A社とB社の検定教科書における異文化理解を促す学習要素

		文化多様性		地球的・現代的課題		
A教科書 Unit名	本文の題材	1)提示	2)背景理解	1)提示	2)背景理解	備考
1	日本の芸術文化交流	○	—	—	—	日本の芸術文化、海外での活躍、芸術文化の融合
2	ブラジル	○	—	○	—	ブラジル文化情報と森林破壊の問題
3	フェアトレードとガーナ	○	—	○	○	ガーナの人々との暮らし、背後にある不公平な状況や原因、問題解決への提案
4	災害	—	—	—	—	地震への備え、東日本大震災関連エピソード
5	ロボットと未来	—	—	○	—	ロボットと人間の共生
6	人権	—	—	○	—	アウンサンスーチー氏の活躍と人生
		文化多様性		地球的・現代的課題		
B教科書 Unit名	本文の題材	1)提示	2)背景理解	1)提示	2)背景理解	備考
1	好きな言葉	○	—	—	—	日本人生徒の好きな言葉: One for all, all for one、日本的価値観の提示
2	日本の芸術文化交流	○	—	—	—	日本の芸術文化、海外での活躍、芸術文化の融合
3	落語	○	—	—	—	伝統文化落語を通じた国際交流、日常文化(麺の食べ方)の違い
4	広島の子原子爆弾	—	—	—	—	原爆ドームと被害者の少女禎子さんの話
5	世界各国の文化と暮らし	○	—	○	—	モンゴル、アメリカ、ケニア、ブラジルを紹介、特にブラジル移民の歴史
6	人権	—	—	○	—	キング牧師の公民権運動
7	英語と自分との関わり	○	○	—	—	日本の工学系大学生の日英バイリンガル使用とその背景事情

5. まとめと今後の課題

A社とB社の中学3年生の検定教科書の異文化理解の観点からの分析結果についてわかったことをまとめる。教科書の中で文化は、外国情報の提示としてなされることが多い。芸術文化が取り上げられた場合、世界には日本とは異なった文化があるという提示の仕方より、日本の芸術文化との類似性や融合として紹介されていた。文化同士の異なりに軸足を置いた取り上げられ方は少なく、異なった文化やそこで暮らす他者を理解していくという視点は周辺の位置づけであるといわざるを得ない。現場教員が有効な異文化理解教育を実践していこうとすれば、教科書を補足する異文化理解の教材づくりの工夫と異文化学習についての専門的知識が必要となることから、踏み込んだ異文化理解教育はあまり実践されていないと考えられる。

先に触れたByram(1997)は、外国語/第2言語の授業において、異文化コミュニケーション能力を伸ばす具体的な方法についても提案している。彼は異文化コミュニケーション・コンピテンスとして関連能力を詳しく定義し、外国語/第2言語の教育目的と実際の教育法の両方に取り入れられるべきであるとしている。コンピテンスは、①知識②態度③解釈と関連付けのスキル④文化への批判的気づき⑤発見と交流のスキルを想定し、具体的な教室における実践例についても考案している。「知識」の分野については、映画・インターネット・本物の資料を使い、事実について取り上げること、ステレオタイプに取り組みさせること等を提案している。「態度」については、好奇心や興味をかき立てる視覚的教材を使うことやメール交換や実際の出会いの機会を設定すること、他の文化の生活について書かれたテキストを使うこと、生徒が持ってきた歌やインタビュー等を使うこと等である。「文化への批判的気づき」については、オーストラリアとドイツの社会を移民への対応という点で批判的に比較すること、「発見と交流のスキル」においては、eメール、実際の出会いの場、ウェブカム、チャット等のバーチャルな出会いを比較して見ること、文化的な誤解についての交渉、ロールプレイ、クリティカルインシデント等を挙げる。「解釈と関連付けのスキル」では、自らの持つ観念に変化が起きるようなテキストの読み方、分析、解釈を行わせること、文学のテキストについて脇役的登場人物の視点から考えさせること、ロールプレイやゲーム等通じて異なる文化の視点をシミュレーションさせてみることを挙げている。これらを日本の中等英語教育の教室場面に取り入れていくための異文化学習と教材作成を具体的にどのようにして効果的に進めていくかについては、今後の具体的な検討が待たれる。

最後に、本研究は2冊の検定教科書の分析に基づいた知見であり、一般化には限界があるといわざるを得ない。今後更なる調査を進め、知見の拡大と検証を行っていきたい。

参考文献

- 1) 深見俊崇(1994)『パワフル・ラーニング—社会に開かれた学びと理解をつくる』北大路書房
- 2) Byram M. (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- 3) de Leo(2010) *Reorienting Teacher Education to Address Sustainable Development: Guidelines and Tools— Education for Intercultural Understanding*. Bangkok: UNESCO Bangkok.
- 4) 池田真(2015)『CLIL(内容言語統合型学習)上智大学外国語教育の新たな挑戦第1巻原理と方法』上智大学出版
- 5) 大迫弘和(2013)『国際バカロレア入門—融合による教育イノベーション』学芸みらい社
- 6) 文部科学省(2014) 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告—グローバル化に対応した英語教育改革5つの提言— http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm (2017年10月22日閲覧)
- 7) 文部科学省(2016) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm (2017年10月22日閲覧)
- 8) 八代京子(2013)『異文化トレーニング改訂版—ボーダレス社会を生きる』三修社

Study on the Possibilities of Intercultural Education in Secondary School English Education

—Analyses on Cultural Diversity and Global Issues in the
Textbooks Approved by the Ministry of Education—

Yuri Okunishi and Junko Kimura*

*Department of Secondary Education, Faculty of Education
Okayama University of Science,*

1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

**Strategy Management and Support Office, Graduate School of Engineering
Osaka University*

2-1 Yamadaoka, Suita-shi, Osaka 565-0871, Japan

(Received October 31, 2017; accepted December 4, 2017)

This study aimed at examining the possibilities of conducting intercultural education in the context of Japanese secondary school English Education. The authors analyzed the two types of English textbooks for junior high school 3rd year students from the points consideration of whether and to what degree each unit addresses cultural diversity and global issues. The results revealed that cultural diversity was addressed in both textbooks with more emphasis on artistic culture rather than daily culture. Also both textbooks focus on the presentation of information about the way of life overseas at relatively shallow levels. The issues of cultural clashes are not squarely dealt with, instead, a foreigner character in one of the textbooks is created to make a comment based on a sense of values that is perhaps unique to Japanese people. It was suggested that development of teaching materials reflecting the realities of human interaction among Japanese and foreign people would help enhance students' thinking skills and therefore contribute to their eventually becoming global citizens through the acquisition of intercultural competencies.

Keywords: intercultural education, secondary school English education, global issues, intercultural understanding.